

福田平八郎における造形性についての一考察

宮崎 治（大分市美術館）

福田平八郎(1892-1974)は、現在の大分市に生まれた。京都市立絵画専門学校に学び、1921(大正 10)年、第 3 回帝展で「鯉」(宮内庁三の丸尚蔵館)により特選を受賞。その後も着実に画技を深め、1932(昭和 7)年、第 13 回帝展に「漣」(大阪市立近代美術館)を出品し大反響を呼び起こし、また戦後の 1953 年の第 9 回日展では、瓦に落ちる雨の情景を斬新な視点で捉えた「雨」(東京国立近代美術館)で画壇に衝撃を与えた。平八郎は、ありふれた身の回りにあるものを題材にして、それを画面上で絵画芸術として昇華させた、近代日本画京都画壇における巨匠の一人であった。

その芸術については、1921 年の「鯉」や、翌年の第 4 回帝展出品の「鶴」、等に顕著に示されるリアルを身上とした写実性と、1942 年の「竹」(京都国立近代美術館)や 1947 年の「紅葉と虹」(大分市美術館)などに窺える単純化した形態と平板な色彩等を特徴とする装飾性、それらを融合したものであることは、平八郎本人及び、多くの評論家等が認めるところである。

また、そのような展開の中であって、平八郎芸術における別の重要な特徴として、その作品に文学性や情緒性がほぼ欠如している点についても、これまでしばしば指摘がなされているところである。大胆な構図で、鮮やかや色彩を用いながらも、その画面には、自己の感情の高ぶりの様子は殆ど留めていない。あくまでも自然の姿を内包した、色と形と構図等によって成り立つ、独自の絵画世界があるのみといっても言い過ぎではないだろう。

平八郎の日本画における近代的性格を考える上で、発表者は定石的ではあるが、やはりここに重要な糸口があると思うのであり、それは、いわゆる、色と形と構図等の在り方、すなわち造形的な取り組み、それが大きく作用した一面があると思うのである。

本発表はその意味で、平八郎が自己の画風を求め、大きく作風を変化させていった 1930 年頃以降から、独自の画風を完成させた 1953 年の「雨」制作の頃を中心に、その近代性という文脈にもからめながら、平八郎の造形的な面における、様々な取り組み、特徴を呈示してゆくものである。

1930 年に東京で活躍する中川紀元等の洋画家や中村岳陵等の日本画家たちと結成した六潮会へ参加した時期の「鮎」等における、飽くなき水についての表現試行や、六潮会出品作等に見られる、ほぼ単色で画面を覆うようにして表出される統一性、さらには 1938 年の「青柿」(京都市美術館)の頃に見られる形態の抽象化、その他「竹」や「鯉」等の題材の違いによる垂直、水平の構図の在りかた等、そうしたことについて呈示、考察し、平八郎芸術を、近代性に繋がると思われる造形性の面から探って行きたい。